〈講演Ⅱ〉 司会：根木　昭英（獨協大学外国語学部専任講師）

生きることへの愛、女性の仕事？

アンヌ・プルトー

【要旨】

カミュの作品において女性の姿はあまり目立たないとはいえ、何人かの女性の登場人物たちは、とくに戯曲のなかで、象徴的役割を演じており、忘れがたく記憶に残る。彼女たちは「生きることへの愛」を独占しているとは言わないまでも、各人が固有のやり方でこの主題に意味深い光をあてている。生の擁護者であり、瞬間に身を落ち着ける彼女たちは、抽象を逃れ具体的なものにとどまり、いまとここにおいて愛を生きるようにと誘うのだ。生きることへの愛は、とりわけ彼女たちの仕事だろうか？

【プロフィール】アンヌ・プルトー：フランスの西部カトリック大学准教授（フランス文学）。国際カミュ学会会長であり、カミュの作品の普及に寄与し、２０１０年と２０１３年にはポンピドゥーセンターとの、また２０２１年にはシャンボン＝シュル＝リニョンの「記憶の場」との共催で、各種の学会を組織してきた。カミュに関する多くの論文を発表し、『アルベール・カミュ事典』（２００９年）や『アルベール・カミュ カイエ・レルヌ』（２０１３年）に協力した。博士論文は『アルベール・カミュ 永遠の現在』（ポール・ヴィアラネー序文、オリゾン、ユニヴェルシテ／ドメーヌ、リテレール、２００８年）として刊行されている。共編に、『アルベール・カミュ「手帖」を読む』（セプタントリヨン、２０１２年）、『カミュ、芸術家』（ＰＵＦ、２０１５年）、『カミュと聖性の眩暈』（ＰＵＲ、２０１９年）、『カミュ、書簡作家』（Ａ．Ｉ．Ｒ．Ｅ誌、第46号、オノレ・シャンピヨン、２０２０年）がある。